放眼日中

国交なき交易

長崎は、グラバー園など西洋のにおいが感じられる場所であるが、有名な眼鏡橋はヨーロッパの建築を模したものではなく、中国様式だったことを知る人は少ない。その距離の近さから華人も多く住み、長崎を彩る祭りである「長崎くんち」も南蛮文化を反映しているといいながら、「くんち」とは中国の重陽節（9月9日）の「くにち」が訛ったものかもといわれるほど、中国との関わりは深い。

長崎県主催のシンポジウム「アジアを繋ぐ長崎ロード～日中の絆を深めた人々～」を覗いてきた。「長崎から東京と上海は等距離にある。日本という枠に縛られない見方が重要」という東京大の濱下武志先生の話は、沖縄の歴史を見る上でも示唆に富んでいた。

また「江戸時代は長崎だけが対外貿易をしていたというのは誤り。実は松前、対馬、琉球のルートもあり、清国とは盛んに交易が行われていた」という説明には、前回書いた「万里茶路」におけるロシアのキャフタの存在などが想起され、どこにでも歴史の抜け穴というものはあるものだと再認識した。

続いて登壇したテレビでもおなじみの寺島実郎氏は「日本と中国は明代後半（日本の戦国時代）から明治期まで400年にわたって国交がなかった」とした上で、「長崎をはじめ、松前、対馬、琉球のルートもつまるところ、対中貿易の窓口であり、日中間の交易は盛んだった」という話をしていた。「政治的な外交関係がないまま、貿易が持続的になされていた政経分離の時代」という言葉は実に新鮮であった。

われわれはどうしても、長崎の交易というとオランダの印象が強い。主体は唐人屋敷に代表される中国人だったのだが、どうもオランダ商館医だったシーボルトやケンペルの存在が大きいのだ。そのオランダだって、フランスに本国を滅ぼされ、国としては独立していなかった時代も、長崎では何とか取り繕い、貿易を継続していた。国とは一体何であろうかと考えてしまう。

江戸時代は鎖国しており、海外情勢は全く分からなかった、と思うのは間違いであろう。意識のある者は、ある程度の情報を掴んでいたであろうし、長崎などを通じて積極的に情報を求めていたはずだ。ただ、一般庶民に移動の自由はなく、海外情報を得る機会はなかった。現在は情報を得ようと思えばいくらでもできるし、実際にその地へ行ってみようと思えば、行ってみることができる環境がある。まずは自分の目で確かめ、世にいわれていることが本当かどうか、確認した上で発言した方がよいと思う。

「中国に嫌悪感を持つ日本人は80%以上」などという調査結果が発表されているが「ビジネス以外で中国に行く人はほとんどいない」という旅行会社の嘆きがそれを物語っている。隣国は動かすことができない存在であり、情勢がどうであれ、相手を知ることが重要なことは言うまでもないのだが。そして何よりも、政経分離、人的な交流こそがある意味で歴史的な長崎モデルであり、政治や外交に左右されない、普通の交流こそが必要とされている。交易など、お互いにメリットのある関係を続けていくことにこそ、持続性があるのだとこのシンポジウムを通じて感じた次第である。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。